

私は生きる、津波で死んだ家族の分まで

(宮古市 90代 女性)

私は昭和8年の津波(昭和三陸津波)を知っています。昭和8年3月3日でした。夜中に地震が起きて、何が何だか分からないまま、近所の人と一緒に山へ逃げました。

波が来て、みんなさらっていきました。家族も家も。小学校5年生の時です。実家は商家で、何不自由なく育てていたのに、一夜にしてひとりぼっちになりました。

それからは宮古の親戚にお世話になったり、北海道の果てまで行ったりして苦労しました。すぎる人もなく、何度天井を見つめて夜を過ごしたかわかりません。それでも、「ふるさとに帰りたい」の一心で辛いことも我慢しました。津波で死んだ家族の分まで生きようと思いました。

ふるさと田老に戻り、結婚して子どもを育てあげ、幸せな生活を送っていたところへ、また、あの時と同じように大津波がやってきました。

田老にも今回の津波で親を亡くした子どもたちがいっぱいいます。私は、その子たちに「頑張れ、自分のためだ。頑張るしかない」と言いたいです。



地震後は地域で水汲み手伝う

～今では仲良くなった近所のおじいちゃん～

(釜石市 震災当時小学5年 男子)

その日の学校は早帰りでした。お母さんも仕事先で、家には誰もいないので、友達と一緒にいつものように父さんの工場の方に帰りました。ランドセルを下ろして、「ただいま！」といった瞬間に地震が来ました。工場は道路一本挟んですぐ海でした。

すぐに事務所の机の下に隠れたけれど、書類は散らばるし、ガラスもバリバリ割れて飛び散り、手をつくると手につきささるような感じでした。じいちゃんとお父さんは留守だったので、すぐにお母さんの仕事先まで行って、一緒に高台にある家に帰りました。

津波の被害もなかったので避難所へは行かず、夜はろうそくとかを使って過ごしました。家では何もすることがなかったから、近所のお年よりの水くみとかを手伝いました。

なので、今では、近所のおじいちゃんおばあちゃんから登下校中に「おはよう」とか「今、部活延長なの？」とか声をかけてもらえるようになりました。



豪雨への備えに又かりあり

～過去の災害教訓を活かせず～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

後で知ったんですけど、その当時のレーダー画像は真っ赤な雲がピンポイントでバーッと押し寄せてきていたんです。私もたいがい雨雲レーダーを見てるんですが、前日に畑で捻挫してしまい、早くから寝ていたのです。

雨があまりにきついので、夜中の3時ごろから起きていました。その雨雲が2時から3時くらいに押し寄せるといのが分かっていたら、もっと早いとこ指示が出せたのに、「抜かってたな」と思っています。

それと、昭和28年の災害教訓が2つあったことを抜かってました。その年の9月に宇治市が台風でひどい目にあったということだけしか頭になく、「台風が来たら怖いで」と思っている、今回みたいに寒冷前線が通過して豪雨になるということは「まあ、ないやろ」と。

でも、同じ年の8月15日に南山城水害が発生し、同じような雨雲が来て、雷が鳴りまくり、大雨が降り、堤防が決壊するなどして多くの方が亡くなっていたのです。南部の方の災害で宇治市は関係ないと思込んでいたというのが、最大の不覚です。

雲なんてきちっと同じコースでくるといことはまずないわけですよ。上いったり下いったりして。だから、そういうことがこの時期にあるんだということがわかっていたら、もうちょっと構えることができたんじゃないかなと、残念に思っています。



毎日、全戸に手作り通信配達で不安解消

～ボランティアのプロ意識にも感動～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

私たちの地域は、土砂崩れによって、5日間くらい電気、水道、ガス、電話も使えず、道路も通れなくなって、完全に孤立してしまいました。

で、住民が情報を欲しがっているだろうということで、地域の名前で通信を発行することにしました。毎夜役員だけでミーティングをして、「電気の復旧は○日になる見通しです」といった情報を盛り込み、全165戸分くらいを毎回刷って、次の朝に住民に届けるということを1か月くらい続けました。だから住民に大きな不安とかはなかったと思います。

それから、床下の泥の掻き出しや樹木の伐採・整備などには、遠くは石巻から、延べ1000人ほどが来てくれました。こっちも気を使っていろいろするんですけど、ボランティアの人たちはいっさいそれをいらんと言ってね。食糧も自分で持ってきて、道路の片隅なんかで食べて、最後きちっと掃除までして帰ってくれますしね。それは見事なもんで、本当に頭が下がりました。

だから、「どっかに被災があったら、我われもいっぺん、こんな年寄り役に立つかどうか分からないけど、ボランティアで行かないかな」と話をしています。



朝がたの小雨に油断

～台風に比べ危機感少なく～

(奄美市 70代 男性 地区役員)

あの日は全く、大雨の予想はしていませんでした。朝がたは小雨だったものですから、家内と畑でも行こうと言っていたくらいです。台風だったらもっと危機感をもっているんですけどね。

それが午前10時を過ぎて急に猛烈な雨が降ってきて、集落の80%近くが海みたいになって、道路は冠水し、家も全部床上浸水になりました。これは大変よということで、ほとんどの方は公民館に避難してもらいました。

道路が冠水で通行止めですよとか、誰がどこに避難していますよといった情報を地元のFMが放送していましたが、停電でしたから電池式のラジオを持っている人以外は情報が入りませんし、昼間で停電に気づかず全く異常を感じていなかった人もいました。

実際、青年団が避難していないお年寄りの家に行ってみると、「部屋の畳が浮き上がってきて初めて気がついた」と言われました。そういう人たちは青年団の連中におんぶされて避難しました。

降り始めは小雨でしたから、まさかあんな大雨になるなんて、誰も思っていなかったのです。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

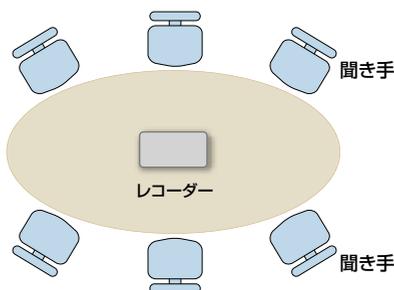
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当事を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省